



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	テンス・アスペクトの認定をめぐって
Author(s)	朴, 恵蘭
Citation	教授学の探究, 11, 7-31
Issue Date	1993-03-10
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/13581">https://hdl.handle.net/2115/13581</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_p7-31.pdf



# テンス・アスペクトの認定をめぐって

朴 恵 蘭

(北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程)

0. はじめに
1. 奥田靖雄氏のアスペクト論
  1. 1 「アスペクトの研究をめぐって」
  1. 2 「時間の表現」
  1. 3 奥田靖雄氏のアスペクト論の成果
2. 言語学研究会のテンス・アスペクト論
  2. 1 鈴木重幸氏のテンス・アスペクト論
  2. 2 高橋太郎氏のテンス・アスペクト論
  2. 3 工藤真由美氏のテンス・アスペクト論
    2. 3. 1 スルーシテイルの基本的対立
    2. 3. 2 シテイルとパーフェクト
    2. 3. 3 シタとパーフェクト
3. 寺村秀夫氏のテンス・アスペクト論
  3. 1 動詞の活用をめぐって
  3. 2 テンスをめぐって
  3. 3 アスペクトをめぐって
    3. 3. 1 4 節の内容
    3. 3. 2 寺村秀夫氏のアスペクト論の問題点
4. おわりに  
[参考文献]

## 0. はじめに

言語教育において、言語の単位体の構成法則としての文法は学習者にも教師にも重要な理論的基盤となる。まず、教える者は、ことばの組み立ての決まりを客観的に認識したうえで可能なかぎり詳細に体系的に説明できなければならないだろう。その際、具体的・客観的文法記述が役にたち、有益であるが、現実には、文法論・文法学説ほど研究者の主観性の濃いものはないようである。

言語教育の現場では既製の文法理論では済まないことが多く、教師の実践上の経験で解決しているのが実情である。

初・中級レベルの日本語教育では、実用的な日本語コミュニケーション能力をつけることが要求される。したがって、文法体系や文法知識を教えることは読解とか、作文、または語彙を有効に使うためにまず必要とされる。その時、教師も学習者もぶつかる問題の一つに「活用」がある。とりわけ動詞の活用は、活用形の立て方や活用形の名称などが教科書によって異なっ

ている。活用形をいくつ立てるか、どのような形態を活用形と認めるか、また活用形をどんな名称で呼ぶかまちまちなのである。たとえば、「仮定形」「命令形」のように機能を用いた名称と「テ形」「マス形」のように形態を用いた名称が混在していて紛らわしい。

従来の学校文法では、未然・連用・終止・連体・仮定・命令の六つの活用形が立てられているが、これは、命名という点でも体系化の点でも問題点があり、多くの批判を受けている。

おなじような問題に、用言の文法的カテゴリーの問題がある。すべての用言に存在する文法的カテゴリーとして、「ムード(いいきり・おしはかり)」「テンス」「ていねいさ」「みとめかた」が、動詞だけに存在する文法的カテゴリーとして、「アスペクト」「ヴォイス」などがあげられる。そのうち、小論では、文末で述語になっている動詞にかならず現れる「テンス」と「アスペクト」のカテゴリーをめぐる諸学説を、主に日本語教育の観点から検討してみたい。

小論は、日本語教育における「テンス・アスペクトの指導プラン」を作成するための出発点として、テンス・アスペクトの、日本語文法体系の中での位置づけ、文法論的な規定、その規定の方法論上の問題などについての検討・確認を試みるものである。

具体的には、日本語教育と結びついた日本語学者と評価されている寺村秀夫氏の代表的な文法書であり、現代日本語の文法の分野ではもっとも基本的な文献の一つとされている『日本語のシンタクスと意味』(全三巻のうち、ここでは特にII巻)を、奥田靖雄氏を中心とする言語学研究会のメンバーの理論に基づいて批判するが、それは、現在のテンス・アスペクト研究の最高の到達点を彼らの理論にみとめるからである。

## 1. 奥田靖雄氏のアスペクト論

現代日本語のテンス・アスペクトの研究の戦後における出発点になって、その後の研究に大きな影響を与えたものに金田一春彦(1950, 1955)がある。この時期からテンス・アスペクトを動詞のカテゴリーであると規定し、これをうけついで、鈴木重幸(1957, 1958)、高橋太郎(1969)などの研究が出た。

奥田靖雄は「アスペクトの研究をめぐる——金田一的段階」(1977)、「アスペクトの研究をめぐる上・下」(1978)を書いて、金田一編『日本語動詞のアスペクト』(1976)の金田一以下の諸論文と鈴木『日本語文法・形態論』(1972)にみられるアスペクト論を批判しながら、アスペクト研究の方法を論じている。奥田はここで、それまでの研究はシテイルだけをあついていたと批判し、シテイルがアスペクトの形であれば、それに対立するスルもアスペクトの形であるとし、スルとシテイルを統一するカテゴリーがアスペクトである、としている。

この論文はその当時のアスペクト論のあやまりを指摘し、その後の研究に見とおしをあたえるものとして多くの研究者にうけとめられている(鈴木重幸「現代日本語の動詞のテンス」(1979)、工藤真由美「シテイル形式の意味記述」(1982)、高橋太郎『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(1985)に奥田の理論が具体化された形で展開されている)。

ここで奥田のアスペクト論をまとめておく。

### 1. 1 「アスペクトの研究をめぐる」(1977, 1978)

(1) 「シテイル」で代表される形態論的なかたちが動詞のアスペクトであるとするれば、「スル」で代表される形態論的なかたちもアスペクトであって、これらの、ふたつのかたちは《つい》をなしながら、oppositional な関係のなかにある。つまり、動詞の形態論的なカテゴリーとして

の aspekto は、「スル」という《完成相》のかたちと「シテイル」という《継続相》のかたちの paradigmatic な体系であって、このふたつのかたちは、一方がなければ、他方もありえないという、有機的な関係のなかにある「kaite-iru 対 kaku」。

(2) 「スル」と「シテイル」との対比によって、アスペクチュアルな意味をあきらかにすることができる。

完成相「スル」— 《分割をゆるさない globality のなかに、ひとまとまりの動作》  
をさしだすこと

継続相「シテイル」— 《継続のなかにある動作》をさしだすこと

(3) 「シテイル」というかたちは、つぎの、ふたつの基本的なアスペクチュアルな意味を実現している。

(一) 動作の継続

(二) 変化の結果の継続

このふたつのアスペクチュアルな意味は、ひとつの文法的なかたちもっている、意味上のふたつのヴァリエーションである。この(一)と(二)の意味の違いは、動詞の語彙的な意味の性格にもとづいている。金田一は、その語彙的な意味を《動作のながさ》や動作の《時間的な量》のちがいととらえたが、それでは、動詞の語彙的な意味と(一)と(二)のアスペクチュアルな意味との結びつきを正しく説明できない。

(4) 「スル」と「シテイル」との、アスペクチュアルな対立をもっている動詞は、「シテイル」というかたちをとりながら、(一)と(二)との意味のうちのどちらを実現するかという観点から、ふたつのグループに分類することができる。

(5) (一)の意味を実現する動詞は《主体の動作》をあらわす動詞(動作動詞)と、(二)の意味を実現する動詞は《主体の変化》をあらわす動詞(変化動詞)と規定することができる。

(一)の意味を実現する動詞グループ

aruku, tobu, hasiru, odoru, arau, kudaku, waru, nomu ……

(二)の意味を実現する動詞グループ

iku, kaeru, hairu, suwaru, sinu, nieru, kowareru, yaseru …

(6) 《動作》は運動の形態であって、《変化》は運動の内容である。《動作》と《変化》とは、運動の形式的な側面と内容的な側面として、相互に対立しながら、ひとつにむすびついていると、みなさなければならない。動詞の語彙的な意味は、この、ふたつの側面のうちの、ある側面はきりすてながら、もうひとつの側面をとりあげるといふかたちで、現実の運動とかがわっている。動作動詞と変化動詞とのあいだには、二側面的なもの(yakeru, tokeru のような動詞)複合的なもの(kiru, otiru のような動詞)、が存在している。

(7) 二側面的な動詞が(一)と(二)のうちのいずれのアスペクチュアルな意味を実現するかをきめる条件には、つぎのようなものがある。

・場面と文脈

場面と文脈によって、二側面動詞が、《主体の変化》をあらわしているか、《主体の動作》をあらわしているのか、あきらかになる。

・連語論的な条件

《空間ので格》《空間のを格》とのくみあわせ……（一）の意味

アスペクチュアルな意味の副詞とのくみあわせ

・文の意味的な構造

動作主体と動作とのむすびつき……（一）の意味

変化主体と変化とのむすびつき……（二）の意味

(8) 「シテイル」というかたちが《単なる状態》の意味を実現するためには、主語と述語とのあいだの意味的なむすびつきが、《もち主と状態》というあたらしい意味的な構造、つまり形容詞構造になることが必要である。

## 1. 2 「時間の表現」(1988)

奥田は「時間の表現(1)(2)」を書いて、再びアスペクトについて論じている。

(1)では、従来あいまいにつかわれてきた「状態」という用語をアスペクト論の観点からといなおして、《状態》という意味的なカテゴリーをつぎのように規定している。

ところで、アスペクトの研究において、この《状態》という用語は、規定なしに、やたらにつかわれている。この用語のもとに、質的にことなる、さまざまな出来事が継続相の「シテイル」の意味とかかわって、おなじ種類の出来事としてあつかわれている。たとえば、存在も状態であれば、特性も状態であり、状態も状態である。したがって《状態》という用語が表現する意味の内容をあきらかにすることが、日本語のアスペクト研究にとって、さしせまった課題である。……(中略)(p. 11)

《状態》とは、いちいちの、具体的な物のなかに一時的におこってくる出来事である。この出来事というのは、物の内面や外面で進行する、物それ自身の動きであって、動作のように、ほかの物へはたらきかけていくようなことはしない。《状態》は、ひとつひとつの物が、ある時間的なありかたのなかで、一時的に採用する、その物の存在のし方である。《状態》はすべての物を一般的に特徴づけることはできない。(p. 12)

また、文のアスペクチュアリティーの表現の中での、形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトの位置づけを問題にしており、他のアスペクチュアリティー表現である「シテシマウ、シテイク、シテクル、」や「シハジメル、シツヅケル、シオワル…」などの位置づけについても考察している。

(2)では、「時間」とはなにか、アスペクトが時間とどのようにかかわるかを問題にしながら、アスペクト、アスペクチュアリティーの意味、機能の分析をおこなっている。

時間の内部構造という概念をこの論文のなかであたえている。その内部構造は外部構造との関係の中で成立していると指摘している。文がテキストのなかでふたつの動作のあいだの時間的な関係を表現しなければならぬとすれば、それはアスペクトの役わりであるとみている。要点をまとめておく。

動作の局面とは〈限界（しきり）に対する過程の関係〉である。動作の内的な構造と外的な時間的な関係とは、〈しきり〉を媒介にしてひとつに統一される。ひとつの動作をめぐる内的な時間と外的な時間とはきりはなすことができない。

〈アスペクチュアリティ〉を、動作に持ちまへの〈内的な時間〉にかかわるさまざまな意味領域であると、みなすことによって、このカテゴリーの意味的な諸要素が、鮮明にうかびあがってくる。〈限界〉とか、〈局面〉とかが、動作それ自身につきまといっている、時間の内部構造の要素あるいはモメントであるが、アスペクチュアリティに所属する、さまざまなアスペクチュアルな意味は、この限界と局面をめぐるつくられている。

### 1. 3 奥田靖雄氏のアスペクト論の成果

奥田の論文の功績は、まず、日本語の動詞のアスペクトが「スル」と「シテイル」という、ふたつの形態論的なかたちの体系であることをあきらかにしたことである。このようにとらえなければ、いくら「シテイル」の文法的な意味をしらべたとしても、それを日本語の形態論的な体系のなかに位置づけることはできないだろう。

奥田は、「シテイル」の基本的なアスペクチュアルな意味のヴァリエーションを《動作の継続》《変化の結果の継続》と規定しているが、このこともたいせつなことである。奥田以前には、これらのアスペクチュアルな意味は、たとえば、《動作の進行》《結果の残存》という用語で規定されていたが、これだと、ふたつの意味の統一性がみえてこない。また、《進行の状態》《結果の状態》というように《状態》というあいまいな用語もつかわれていて、「シテイル」があらわす、アスペクチュアルな意味の体系の研究がさまたげられていた。奥田によって、「状態」という用語が、存在や特性と区別され、カテゴリーカルな意味とアスペクチュアルな意味の分析がいっそふかめられている。

奥田による、動作をめぐる時間的な関係の考察は、工藤真由美の「現代日本語のパーフェクトをめぐる」（1989）にうけつがれ、テキスト構成におけるアスペクトの機能の分析の核をなしている。

奥田および言語学研究会のメンバーにおけるテンス・アスペクトの体系は、次のようなものである。

表 1

テンス \ アスペクト	完成相	持続相
非過去	ス ル	シテイル
過去	シ タ	シテイタ

### 2. 言語学研究会のテンス・アスペクト論

日本語の動詞のテンス・アスペクトの研究は、言語学研究会の主要なテーマのひとつであって、奥田の論文に提出されている基本的な命題から出発して着実に進展してきている。小論での寺村のテンス・アスペクト論の批判は、彼らの研究の到達点に立って行こう。この節では、鈴木重幸、高橋太郎、工藤真由美の三氏の代表的な論文をとりあげて、小論の全般的な課題に関するかぎりにおいて紹介しておきたい。

## 2.1 鈴木重幸氏のテンス・アスペクト論

鈴木は、奥田の批判(1978)をうけとめて「現代日本語の動詞のテンス」(1965)を書きあらためた。それが「現代日本語の動詞のテンス」(1979)である。この論文は65年の論文とくらべて、記述のあやまり、あいまいさがとりのぞかれていて、現代日本語のテンスの研究の代表作のひとつになっている。

まず、この論文から鈴木のリテンス・アスペクトに対する見解がみごとに記述されているところを引用しておく。

文のなかにある終止形のテンスの形は、叙述法断定というムード的な意味とともに、完成相あるいは継続相というアスペクト的な意味とからみあってテンス的な意味をあらわしているということになる。図式化していえば、動詞の語彙的な意味は、アスペクトを媒介にしてテンスと関係し、ムード・テンスを媒介にして現実の時間に関係づけられるわけである。

われわれのまえにある二つのテンスの形式のなかには、テンス・アスペクト・ムードの意味が相互作用しながらからみあって存在している。そして、たがいにあい手のなかにしみこみ、部分的にとけあって、たやすく分離できないばあいもありうる。このばあい、機械的なきりはなしはさしひかえて、テンス＝ムードの意味、テンス＝アスペクトの意味としてあつかわなければならないこともあるだろう。(p. 10)

この論文で鈴木は、「スル」と「シタ」という対立する二つの形をテンスの文法的な表現形式としてとらえながら、これらの形のなかに表現されているテンス的な意味をほぼ完全に、体系的に記述している。

叙述法のテンス形式における完成相の基本的な意味を、「動詞のあらわす動きや変化を分割をゆるさないひとまとまりのものとして現実の特定の時間に関係づけること」であるとする。完成相の過去形は出来事を過去の特定の時間に関係づけるし、現在未来形(＝非過去形)は未来の特定の時間に関係づける。これらの二つの形の基本的なテンス的な意味を「アクチュアルなものとし、その変種を「非アクチュアルなものとして説明している。

- ・現在未来形の三つのテンス的な意味と対立の関係

(アクチュアルな) (非アクチュアルな)

(未来)	アクチュアルな未来	非アクチュアルな未来	
(現在)		非アクチュアルな現在	(p. 32)

- ・現在未来形と過去形との対応

(現在未来形) (過去形)

アクチュアルな未来 — アクチュアルな過去  
 非アクチュアルな現在 }  
 非アクチュアルな未来 } — 非アクチュアルな過去

(p. 33)

過去形の基本的なテンスの意味は、アクチュアルな過去であるが、一定の条件のもとで

- (1) 現在の直前の動きや変化  
「あっ、電気がきえた！」
- (2) 現在の状態に結果がのこっている過去の変化  
「大きくなったね、外であつてもちょっと解らないくらいだ。」
- (3) 現在すでに実現済みであること  
「御飯は？」「もうすみました」

などの変種をみとめ、これらを現在とむすびついたペルフェクト的過去と呼んでいる。

また、完成相過去形は、こうしたペルフェクト的なニュアンスをもたず、現在から相対的にきりはなされた過去の特定の一つの時間を実現した動きや変化をあらわすこともできるとする。

- (4) 現在からきりはなされた過去（アオリスト的過去）  
「父はこの間の伊豆の地震で死にました。～」

鈴木は、寺村（1971）が(3)に相当するものを「完了」とよび、(4)に相当するものを「過去」とよんで、終止的な「タ」に二つの意味をみとめていることに対して、「この形に二つの多義的な意味をみとめるとしても、一方をアスペクトの意味、他方をテンスの意味とみることはできない。テンス的な意味とアスペクト的な意味は排他的ではなく、終止的な述語動詞の意味として相互作用しながら共存している」とみる。この二つの意味は、それぞれ独立の排他的な意味ではなく、文法的な意味の、文脈、場面、話し手の予期のあるなしなどによって生じるニュアンスのちがいであると考える。

非アクチュアルな過去は、過去の一定の期間における、

- (1) 非連続的なくりかえし  
「あの時もさ、君はよく指を切ったぜ。～」
- (2) コンスタントな属性  
恋という字は、昔はむずかしい字をかいた。

をあらわす、とする。

## 2.2 高橋太郎氏のテンス・アスペクト論

高橋も鈴木とおなじく奥田（1977）の批判をうけとめて、『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』（1985）をかいている。これには、膨大な資料から得られたテンス・アスペクトに関する分析が報告されている。次の八種の語形を対象にして、それぞれの形式の実現するテンス・アスペクトの意味とそれを実現する条件について記述している。

完成相のアスペクト動詞	非過去形……………する、します
	過去形……………した、しました
継続相のアスペクト動詞	非過去形……………している、しています
	過去形……………していた、していました

この報告では、まず、アスペクトを非分割と分割の対立のなかでとらえ、そのアスペクトの意味が典型的にあらわれているものを、基本的なアスペクトの意味が実現しているものとしてあつめ、そのほかのものをアスペクトの意味がずれているものとして、何種類かにわけた。たとえば、「そびえている、ひっそりしていた」など状態の持続過程のなかにあることをあらわすものを、準アスペクトとよび、「おもう、感じる」などの完成相非過去形で一人称の心的活動をのべるもの、「ばかっている、一致していた」などのできごと過程のなかにはない属性をあらわすものはアスペクトから解放されるとする。準アスペクトと脱アスペクトを区別したのはこの報告がはじめてである。

テンスは、発話時を基準にした、動作や状態の時間位置のあらわしかたに関するカテゴリーであるとする。また、反実仮想のばあい、決定の表現や発見、確認、おもいだしのばあいなどは、ムードによるテンスの変容とみる。動詞がテンスから解放される現象にもとくに目をむけて、なりたつ時間に関係のない命題のなかでの動作や質的属性「ことなる、一致している」など、コンスタントな属性をあらわすもの、「山がせままっている、線路がはしっている」などをテンスからの解放とする。

テンスからの解放とアスペクトからの解放は、同時にあらわれることもあるし、かたほうだけがあらわれることもあるとし、その両者をつきあわせながら考察している。

### 2.3 工藤真由美氏のテンス・アスペクト論

現代日本語のテンス・アスペクトの体系はいかなるものか、という問いに、ほぼ完全に答えられるすぐれた論文として、工藤の「現代日本語のパーフェクトをめぐって」(1989)をあげることができる。

奥田(1977, 1978)、鈴木(1979)に従ってテンス・アスペクトの研究を一連の論文で展開してきた工藤は、この論文で「パーフェクト(perfect)」という用語をつかうことによって、一つの問題提起を、またテンス・アスペクトのあらわす意味の説明を行っている。

工藤はシタがあらわす意味を、異なる見方ととらえる見解にふれている。たとえば、シタにはスルにはない「完了」というアスペクトの意味があり、それ故、スルーシタは全面的にあるいは部分的に「未完了—完了」というかたちでアスペクト的に対立しているというとらえかたに対して、工藤は、「このことは、スル(シタ)—シテイル(シテイタ)のアスペクト的対立を認めないこと、1つの形式におけるテンス的なものとアスペクト的なものの統一を認めないことにつながっている」としている。これは、私の考えでは、寺村のテンス・アスペクト論のもっとも基本的なあやまりの指摘になる。

工藤は、現代日本語において、〈パーフェクト=完了〉を表す中心的な形式はシタではなく、シテイルではないかということから、「パーフェクト」とは何かを追究している。ここでは、終止の位置におけるテンス・アスペクトの意味・機能の説明を主に取りあげる。

#### 2.3.1 スルーシテイルの基本的対立

寺村(1984)にあげられている次の例(留学生の作文)は、スル(シタ)とシテイル(シテイタ)とのアスペクト対立の本質を鮮やかに示している。

(前略)その夜、山ノ上旅館で泊まっていた。翌日の朝、早く起きて、山にのぼった。

→(正しくは泊まった)

この対立は、第一に、〈とらえかた〉の違い、運動の時間的展開の相違である。

- シタでは、点として、つまりは圧縮的にひとまとまり的にとらえられる。  
「徳川幕府は300年の間日本を支配した」
- シテイタでは、幅として、おしひろげられて（拡張）持続的にとらえられる。  
「先生が僕をにらんでいた」

アスペクトは、「出来事＝運動＝事態の時間的様態」を表すカテゴリーであると同時に、「出来事＝運動＝事態間の時間関係」を示すカテゴリーである。それ故、この使い分けを間違えると、整ったテキストができない。テキスト上の機能と実質的なアスペクト的意味とはきりはなすことはできない。アスペクトは、テキスト構成的機能をはたすのである。

シテイルは単なる持続性ではなく、〈同時＝持続性〉を表すと考えなければならない。

どこに行っていたのよ。3度も電話したのよ。(ただいま浪人)

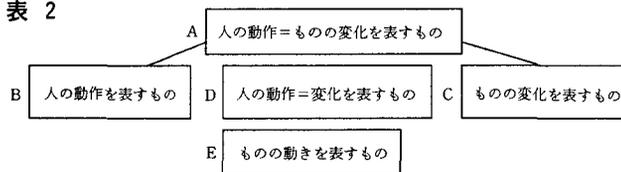
12時になったら、きちんと寝るの。それまではお話しするのよ。時計、私、みてますわ。  
(旅路)

この場合スルがつかえないのは他の出来事（電話する、お話しする）との同時性をシテイルが表しているからである。

スルーシテイルのアスペクト対立の本質はまた同時に語彙の意味とも法則的にむすびついている。このことに関して、工藤（1987）では動詞を五分類しておいて、それぞれのタイプのスルーシテイルの対立のありようの記述をしている。

- 五つの動詞グループの関係

表 2



スルが動詞の語彙の意味との法則的なむすびつきのなかで表す具体的なアスペクト的意味には、〈始まってから終わるまで全体を圧縮的に〉とらえるというものと、〈限界の達成を全面に出して圧縮的に〉とらえるというものがある。

〈全体的ひとまとまり性〉

あしたはまず街を見る。それから舟で島に渡るんだ。

〈限界達成のひとまとまり性〉

あしたは8時に帰るよ。すぐごはん食べるから用意しといてね。

### 2. 3. 2 シテイルとパーフェクト

現代日本語のパーフェクトの規定において、次のことを考えなければならない。

- a 基本的にはアスペクトだが、〈設定時点に対する先行性〉というテンス的要素を含みこんでいること。
- b アスペクト的にみても、テンス的にみても、いわば2つの時間段階をとらえていること。アスペクト的には運動のひとまとまり性とその後続段階=効力をとらえていること。テンス的には出来事時点とともに設定時点が常にあること。

シテイルは、①持続性 ②パーフェクト性 ③反復性 ④恒常的特性 という4つの意味を表しうる。①②は個別=具体的であって、具体的な時間にくぎづけされており、③は時間へのくぎづけが抽象化しており、④は脱時間的=恒常的である。

文レベルにおいて、機能的な観点から次のようなテンス=アスペクトの体系を考える。

	〈ひとまとまり性〉	〈持続性〉	〈パーフェクト性〉
未来	スル	シテイル	シテイル
現在	/	シテイル	シテイル
過去	シタ	シテイタ	シテイタ

このように3つの系列をみとめることは、テキストの時間構造を記述=説明するのに有効である。テキストの時間構造は、シタが表す〈ひとまとまり性=継起・前進性〉と、シテイタが表す〈持続性=同時性〉を基本的骨組みとしつつ、シテイタが表す〈パーフェクト性=一時的後退性〉がつけくわわって立体的に構成される。

アスペクトのテキスト構成的機能は、出来事=運動間の客観的時間関係を示す面と同時に、話し手=書き手がどう記述=提示するかという面をもっている。

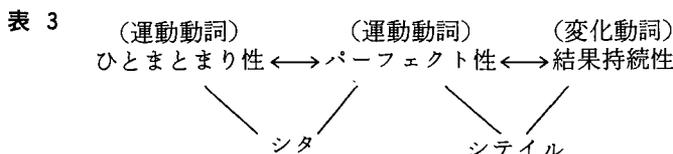
出来事の生起順序に従わずに、生起順序をいれかえて記述する場合、パーフェクトが必要になる。パーフェクトは、シテイルの派生的=二次的意味であるが、このことは、またパーフェクトのテキスト構成的機能における二次性である。それ故、一定の構文的、場面=文脈の条件のなかでしか現象しえない。

シテイルは次のような形式とむすびつくと、パーフェクトを表す。

- a. トキニ、マエニ、マデニ、ウチニなど、普通スルと共起する形式
- b. 動作場所を表すデ格とむすびついた場合

また、シテイルの基本的意味である〈結果持続〉と、派生的意味である〈パーフェクト〉はアスペクト的に同じではない。〈結果持続〉は、先行する変化を前提とはしつつも、それには直接ふれずに、後続段階=結果のみをとらえるが、〈パーフェクト〉は、運動自体はひとまとまりとしてとらえつつ同時にその後続段階=効力をもとらえる。

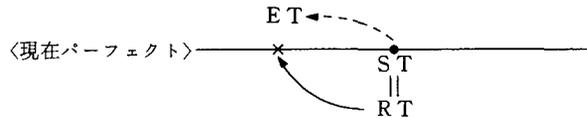
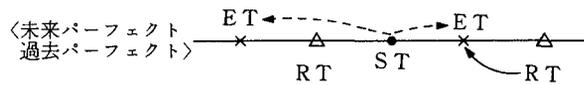
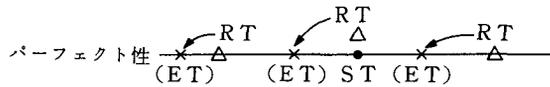
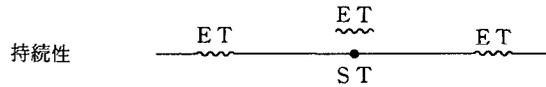
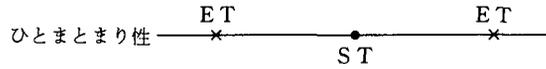
・シテイル(シテイタ)とシタの表すアスペクト的意味は、次のとおりである。



・テンスとパーフェクトのかかわりを図示すれば次のようになる。

表 4

発話時点 = ST, 出来事時点 = ET, 設定時点 = RT



(p. 90)

このようにパーフェクトが出来事時点の時間的位置づけにあって常に設定時点を介在させている点にこそ、〈現在パーフェクト〉がテンス的に二重性をもつことの根拠がある。

### 2. 3. 3 シタとパーフェクト

終止の位置のシタの2つの意味=機能のうち、〈定過去〉は、現在ときりはなして過去の出来事をとらえており、〈現在パーフェクト〉は、現在とのつながりのなかで過去の出来事をとらえている。

去年中国に行きましたか。いいえ、いきませんでした。 → 〈定過去〉

もう中国に行きましたか。いいえ、まだいっていません。 → 〈現在パーフェクト〉

両者の相違は、同じ過去の出来事を話し手がとらえていくにあたって、話し手の時間の基準を現在におくか、過去の出来事そのものにおくかにある。

両者は異なるテキストのタイプ、テキストの構造のなかにおかれる。

〈かたりのテキスト〉 → 〈定過去〉

〈はなしあいのテキスト〉 → 〈現在パーフェクト〉

現代日本語には、過去の出来事を述べるにあたって、シタ(定過去、現在パーフェクト)、シテイルという2つの形式が用意されている。これらの時間的意味の違いは、場面=文脈、また、同時にモダリティー、さらには文体の相違でもある。

この論文では、シテイルが〈持続性〉とともに、〈パーフェクト性〉という個別=具体的な運動とかかわるアスペクトの意味を表すことと、形態論的レベルに対応する文レベルの意味とし

て〈定過去〉と〈現在パーフェクト〉があることが確認できた。また、文レベルにおいて、機能的な観点からテンス・アスペクトの体系が明らかになったと思われる。

### 3. 寺村秀夫氏のテンス・アスペクト論の問題点

『日本語のシンタクスと意味』全三巻を通じて寺村は、コト（話し手の述べようとする事柄の内容を客観的に描く部分）とムード（コトを素材として話し手の態度を相手に示そうとする主観的部分）を担う形式の意味と構文機能を述べている。

『日本語のシンタクスと意味』の構成は次のようになっている。

#### 第I巻

- 第1章 文の基本的構成
- 第2章 コトの類型
- 第3章 態——格の移動と述語の形態との相関

#### 第II巻

- 第4章 活用
- 第5章 確言の文
  - 1. 確言のムード
  - 2. 時間と無関係な確言的陳述
  - 3. 陳述の時制——テンス
  - 4. 動的事象の諸相——アスペクト
  - 5. 従属節のテンス、アスペクト
- 第6章 概言の文と説明の文——二次的ムードの助動詞

#### 第III巻

- 第7章 取り立て——係りと結びのムード
- 第8章 構文要素の結合と拡大——連用と連体

小論では主に第II巻について考察するのであるが、第II巻はコトの内部を扱った第I巻を受けて、そのコトに対する話し手の把握の仕方を表す要素、特に文の末尾に現れるムード形式の意味と機能を説明している。

表 5

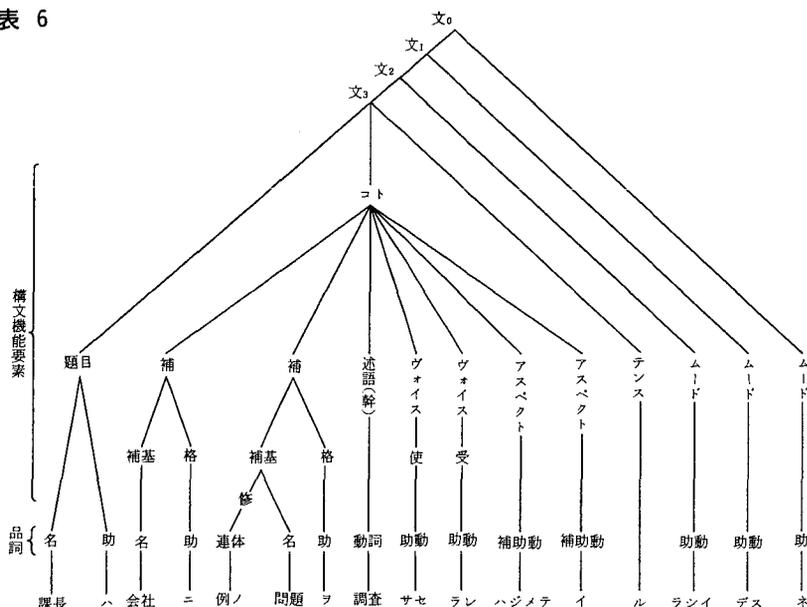
・ムードの形式	$\left\{ \begin{array}{l} \text{コトに対するもの} \\ \text{(対事的ムード)} \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{確言 (現在形・過去形の活用語尾)} \\ \text{概言的表現 (ダロウなどの助動詞)} \\ \text{事態説明的表現 (ハズダなどの助動詞)} \end{array} \right.$
ムード		

(I, p. 60)

ムードを表すカタチとしては、用言の活用語尾とムードの助動詞、そのほかに文末に現れる「ネ」「ヨ」「カ」など、いわゆる「終助詞」があるとす。

・文の構成図

表 6



(I, p. 60)

3. 1 動詞の活用をめぐる

第4章は、その後に取り上げるテンス・アスペクトやムードを表す述語の形態を体系的に整理するためのものとして構成されたと思われる。以下簡単に第4章の内容を要約してみる。

活用を、語の内部構造に関わる形態論と文全体の意味に関わるシンタクスとの「いわば相互乗入れの領域」であると認め、「概念的コトが、現実の文として発せられるときに、話し手の態度を表すべくどうしても述語がそこから一つを選ばなければならない形態素の体系」と定義している。

活用形は、コトのかなめである述語が文として成り立つときに必ずどれか一つを取らなければならないという意味で、文成立に必須の構文要素である。「文の必須的な構文要素であるムードの一次的な形式」とされる。

活用形と単語の同一性ということに関しては、たとえば、「書ク」「書ケ」は、同じ語幹、すなわち実質形態素を共有し、異なる活用語尾、すなわち機能形態素をもつ異なる語であると考えられる。また、同じ語幹を共有し、活用語尾において異なる語の集合は、一つの単語族を形成する（書ク、書キ、書ケ、書コウ……）

活用語尾という形態素を、その語幹と先行する補語や修飾語によって表されるコト（叙述内容）を包んで話し手の態度を表す構文要素であると考えられる。

寺村は、学校文法の活用表を、

- (i) 活用形の認定、定義、命名が無原則で一貫性がない。
- (ii) 多くの説明に事実にあわない点がある。
- (iii) 文語文法の枠に固執し、現代語の活用の記述にあわない。

と批判し、自らの活用表作成の方針として次の三つを立てている。

- (1) 活用語尾は単一の形態素であること。
- (2) 活用語尾たる形態素には、それでその発言が言い切りになるか否かは別として、それに固有の描叙類型的意味が認められること。
- (3) 形態的に同一である活用語尾は、構文的機能は違っても、同一の活用語尾とする。逆に構文的機能は同一、またはにかよっていても、形態的に異なるものは別の活用語尾とし、呼び名の上で区別する。

以上の三点から、学校文法でいう「未然形」は活用形と認めない、「書かない」は一つの活用形とはせずに「kak - anai」(語幹+助動詞)とする、「書いた」は動詞の活用形(過去形)とする、「連体形」と「終止形」は一つの活用形とする。

・学校文法の活用表 — 動詞

表 7

活用 の 種類	語 例	活用形 おもな用法 語幹	未 然 形	連 用 形	終 止 形	連 体 形	仮 定 形	命 令 形		
			ナイに 続く	ウ、ヨウに 続く	マ中 ス止 にす る	テ、タに 続く	言 い 切 る	体 言 に 続 く	コト、モノ、 その他	バ に 続 く
五 段	書く 行く 読む 歌う なさる	かい いよ うた うなさ	か か ま わ ら	こ こ も お ろ	き き み い り	い っ ん っ	く く む う る	く く む う る	け け め え れ	け け め え い
上 一 段	見る 起きる	○ お	見 き	見 き	見 る ぎ る	見 る ぎ る	見 れ き れ	見 ろ(見よ) き ろ(きよ)		
下 一 段	出る 教える	○ おし	出 え	出 え	出 る え る	出 る え る	出 れ え れ	出 ろ(出よ) え ろ(えよ)		
カ 変	来る	○	こ	き	く る	く る	く れ	こ い		
サ 変	する 信ずる	○ 信	し じ	し じ	す る じ る	す る じ る	す れ じ れ	し ろ(せよ) じ ろ(ぜよ)		

(II, p. 28)

・寺村の動詞、形容詞の活用表

表 8

- 動詞 I類 (V<sup>I</sup> と略記) 語幹が子音で終わるもの  
 II類 (V<sup>II</sup> と略記) 語幹が母音で終わるもの  
 III類 (V<sup>III</sup> と略記) クルとスルおよびスルの変種  
 形容詞 (A と略記) : samu-, ōki-など。

ムード	基本語尾	タ系語尾
確言	V { I -u II -ru III {suru kuru } } <基本形> A -i	V { I -ta~-da II -ta III {sita kita } } <過去形> A -katta
概言	V { I -ô II -yô III {siyô koyô } } <推量意向形> A -karô	V { I -tarô~-darô II -tarô III {sitarôta kitarô } } <過去推量形> A -kattarô
命令	V { I -e II -ro III {siro koi } } <命令形> A _____	_____
条件	V { I -eba II -reba III {sureba kureba } } <レバ形> A -kereba	V { I -tara~-dara II -tara III {sitara kitara } } <タラ形> A -kattara
保留	V { I -i II -φ III {si ki } } <連用形> A -ku	V { I -te~-de II -te III {site kite } } <テ形> A -kute
		V { I -tari~-dari II -tari III {sitari kitari } } <タリ形> A -kattari

(II, p. 44)

寺村の活用表では、第一の組織づけの基準であるムードに、確言、概言、命令、条件、保留をみとめ、それぞれに基本語尾の形とタ形語尾の形をたてている。しかし、第II巻の p. 61 に示しているムードの一次的形式のうち、意志表明と勧誘は活用表には現れない。また、確言、概言、命令は「文末で文を完結させるもの」として、条件、保留は「一つのコトをまとめ、後の文と関係づけるもの」として、つまり、文の「言い切り」という機能の異なる形式が同じレベルの基準になっている。

ここで、はやくから学校文法の批判をはじめた「言語学研究会」の活用表として、高橋太郎 (1987 b) のものを取りあげることにする。 (p. 52)

この活用表では、語形が文法的な意味のシステムによって配置されている。右上の、カテゴリーを示した三角形のわくは、その下または左へ延長することによって、そのカテゴリーをかたちづくる語形の名称を得ることができる。そして、それらの名称を示したわくを左または下へ延長することによって、その名称によってまとめられた諸語形を得ることができる。こうして動詞の諸語形が、その文法的な意味との関係で体系的に配置され、形式と意味の統一を実現している。

表 9

条件・譲歩形		中止形	連体形		いいおわり形				機能 (きれつづぎ)	ムード (きもち)	テンス (とき)	基本形	みとめかた	ていねいさ	
					命令形	さそいかけ形	のべたて形								推量形 (おしはかり形)
きっかけ形	譲歩形 (ゆずり形)	条件形	第一中止形	第二中止形	過去形	非過去形	過去形	非過去形	過去形	非過去形	過去形	非過去形	みとめの動詞	ふつうの動詞	
			よむ	よんだ											よむ
よむと	よんだら	よんでも	よんで	よみ	よんだ	よむ	よめ	よもう	よんだらう	よむだらう	よんだ	よむ	よむ	みとめの動詞	ふつうの動詞
よまなくたって	よまなかったら	よまなくても	よまなければ	よまず(た)	よまなかった	よまない	よむな	(よむまい)	よまなかったらう	よまなかつたらう	よまなかった	よまない	よまない	うちけしの動詞	ていねいの動詞
よまないと	よまなかったら	よまなくたって	よまなければ	よまず(た)	よまなかった	よまない	よむな	(よむまい)	よまなかったらう	よまなかつたらう	よまなかった	よまない	よまない	うちけしの動詞	ていねいの動詞
よみますと	よみましたら	よみましても	よみますれば	よみます	よみました	よみます	よみなさい	よみましよう	よみましたらう	よみでしやう	よみました	よみます	よみます	みとめの動詞	ていねいの動詞
よみませんと	よみませんでしたなら	よみませんでも	よみませんで	よみません	よみませんでした	よみません	よみなさい	よみましよう	よみませんでしたらう	よみないでしやう	よみませんでした	よみません	よみません	うちけしの動詞	ていねいの動詞

基本的な語形変化

単語の認定に関して、鈴木重幸「動詞の活用形・活用表をめぐって」(1989)は次のように述べている。

助動詞は寺村にとっても単語(付属語)である。そこで、助動詞 ana-i, are-ru, ase-ru は語幹 yom- とくみあわされると説明することになる。一般に、語幹とは、語尾または接尾辞とともに単語をつくる要素であって、単語ではない。寺村はここで、stem や suffix から区別される、伝統的な word とあきらかに矛盾する、単語の認定をおこなう。しかし、その根拠についてはとりたててのべていない。

べつところで、寺村は活用語尾の特徴として《単一の形態素であること》をあげている(『II』p. 42)。寺村の助動詞は2つの形態素からなるから、活用語尾ではないわけだ(p. 43-44)。しかし、yomanai は yomu の活用形ではないとしても、だからといって、-anai が助動詞でなければならないということにはならない。yomu- が単語でなければ、それとくみあわされる -anai も単語ではない。当然、単語の要素(接尾辞)でなければならない(注)。

(p. 129)

鈴木は、このような矛盾は、構造主義にしたがって単語と形態素との質的ながいをみず、生成文法論にしたがって単語も形態素も無差別に「構文要素」に対応させていることに由来するとしている。

以上のことから、単語の認定、語の内部構造を形態素主義にもとめる寺村の活用形の組織づけはかならずしも学校文法を克服したとは言えない。

### 3. 2 テンスをめぐって

第5章では、活用形の一次的ムードの表現のひとつである確言の文が観察の対象となる。確言の表現は「あるコトを、たしかな事実として聞き手に伝えようとする表現」であると規定し、これには発話の時点とコトの時点との関係が意識されている場合と、時とはまったく関係のない発話の場合があるとする。時と関係のある確言的表現は基本形と過去形で、その対立についての考察が「3. 陳述の時制 — テンス」にのべられている。

寺村は、テンスの問題を観察する視点として、次のような三つの課題を設定する。

- (i) どういう種類の述語か
- (ii) 述語が、文末か、従属節のそれか
- (iii) 「叙実的」か(=事実に着目して、それを客観的に描こうとする場合)  
「叙想的」か(=事実を話し手がある特別な心理状態で見、その事実に対する自分の反応を表そうとする場合)

述語の種類は状態的述語と動的述語の二種で、文末ではどちらの述語も叙実的用法と叙想的用法がある。叙実的用法には基本形と過去形の対立が認められ、それぞれの形が、状態的述語の場合は現在と過去の状態を、動的述語の場合は現在の習慣と過去の習慣、あるいは確定的未来の事象と過去の事象を表すとされる。

叙想的テンスの用法は過去形のみ認められ、その種類として

- (i) 期待 (=過去の心象) の実現  
ヤッパリ今日ハ休ミダッタ
- (ii) 忘れていたことの想起  
アレハ2二銀デシタ
- (iii) 過去の実現の仮想を表す過去形  
「そうね。あの人が刑事事件にしなかったら、会社は潰れなかった。父は瀬川さん  
を恨んで死んだわ」
- (iv) さし迫った要求  
(野次馬に) 帰ッタ、帰ッタ
- (v) 判断の内容の仮想  
早く帰ッテ寝タハウガイイ

の五種があるとしている。

小論では、テンスを観察する視点の (i) の述語の種類は動詞に限る。(ii) の述語の位置に関しては、文末に現れる場合だけを検討したい。(iii) の「叙実的」か、「叙想的」かの分け方には疑問を感じる。寺村による基本形の用法の説明 (p. 68) では、確言的陳述のムードとして「無時間的陳述」と「時間的陳述」をたてている。ここで過去形のみをテンスとして認めている「叙想的」用法も「時間的」ではないだろう。これらの用法は、テンスの対立のうちがないため、テンスの用法として認めるのは無理である。高橋 (1985) では、これらの用法に相当するものを「テンスからの解放」や「ムードによるテンスの変容」としてあつかっている (小論の 2. 2 を参照)。

日本語の「ル、タ」の形式には、ムード、テンスのカテゴリーが認められる。このように数のすくない形が多義的あるいは多機能的である場合は、その一つ一つの意味の実現する条件を明らかにすることが要求される。なによりもまずそれぞれの形をカテゴリーのもとに組織づけなければならないだろう。こうした形態論的なカテゴリーの体系の中でその多機能的な意味はもっと明白に区別することができると思う。

そうだとすれば、テンスを「ムードの一つである確言のムードが、時に関わる文である時に、必ず選ばなければならない形式、つまりムードの一つの形式」であるとする寺村の規定の位置づけは広すぎるのではないか。ムードの形式の体系は、たとえば、いいきりにおいて、叙述か、さそいかけか、命令かの対立であって、テンスはこれらに直接対立しない。

たしかに、日本語では、テンスとムード、テン・高橋太郎 (1987 a) の形態論的なカテゴリーとアスペクトが形態論的にからみあっている。

表 10

動詞的カテゴリー				用言的カテゴリー			
意思動作をあらわす	格を支配する らわす	主体と対象の参加するウゴキをあ	ウゴキ (動作・変化) をあらわす	述語になる 意思動作をあらわす	モノの属性をあらわす……	述語になる	機能・意味
もくろみ (使役・やりもらい)	敬意 (尊敬と謙讓)	他動性	アスペクト・局面				形態論的なカテゴリー

しかし、体系を正確にとらえるために、また、日本語教育の立場からは、動詞の語彙の意味や文脈、構文論的な条件に応じてテンスの意味とムードの意味を説明するのがいいと思われる。

### 3. 3 アスペクトをめぐって

第5章の4節がアスペクトの観察になっている。

日本語で、アスペクトの意味を表す形式として、ある事象を過程の中に位置づけ、完了・未了、継続その他、動的事象の諸相を表す役目をするのは、

(i) 動詞の活用形 = アスペクトの一次的形式

(ii) 動詞のテ形に後続する補助動詞の一部 = 二次的形式

(iii) 動詞の連用形に後続する補助動詞の一部 = 三次的形式

であるとする。

#### 3. 3. 1 4節の内容

4節の内容を簡略に記す。

(i) 一次的アスペクト — スル（未然）とシタ（已然）

コノ子ハ今ニ大キクナル （未然）

「もう解かったよ。何遍繰返したって同じことだ。」（已然）

動的述語の過去形が、ある時点において、ある（幅をもつ）事態が既に実現したことを表すことを「已然」と呼ぶ（事態の発生、開始と、終了、完了の両方を含む）。それに対して、動的述語の基本形は、「現在は未だ実現していないが、いずれは必ず実現する」ということ（「未然」）を表すのが基本である。

已然・未然是、ある幅をもつ事態を背景として、あることの実現・未実現を問題にするのであって、点としての事態の前後関係を問題にするテンスとは異質のものである。

時間に関わる確言文の述語における基本形と過去形の対立は、基本的に「現在」と「過去」というテンス的対立であるが、動的述語の場合には、それに「未然」と「已然」というアスペクト的対立が重なることがある。

(ii) 二次的アスペクト — テ形に後続する補助動詞

動詞のテ形に後続する補助動詞のうち、（～シテ）イル、アル、シマウ、イク、クルの五つの意味をアスペクトの観点から観察する。

1) ～テイル — 已然の結果の存在

～テイルのアスペクトの用法として、

(a) 動作や現象が継続していること

雪ガ降ッテイル

(b) ある過去（以前）のできごとが終わって、その結果がいまある状態として残っていること

金魚ガ死ンデイル

(c) 現在での習慣を表す用法

父ハコノ頃6時頃ニハ起キテイル

(d) 過去の事実を回想して、いわば、頭の中に再現させるような用法

アノ人ハタクサン小説ヲ書イテイル

がある。「既然の結果が現在存在していること」が～テイルのアスペクト的意味の中心的、一般的意味である「(a)と(b)」。

～テイルという形は、現在五官で（典型的には視覚で）捉えた事態を、現在より以前のいつかに実現したことと結びつけて理解するところから生まれる表現の形である。

また、継続でも結果でもなく、品定めの、性状規定的、その意味で形容詞のような、物事の様子、性質、形状、印象などを表す用法もある「(e)」。

コノ作品ガ一番スグレテイル

2) ～テアル — 処置の結果の存在

～テイルが一般的な既然の結果の存在をいうのに対して、～テアルは、人が何かに対して働きかける動作、行為の既然の結果の存在をいう。

壁ニ絵ガカケテアル

3) ～テシマウ

行為・動作、できごとが完了したことを特に強調する表現である。

暗クナラナイウチニ、ヤッテシマオウ

4) ～テクル

動詞の表す現象が、物理的・心理的に、自分に向かって次第に接近することを表す。

富士山ガ見エテクル

気持ガ沈ンデクル

5) ～テイク

動詞の表す現象が、自分（話し手）から次第に遠ざかることを表す。

ローソクノ火ガ消エテイク

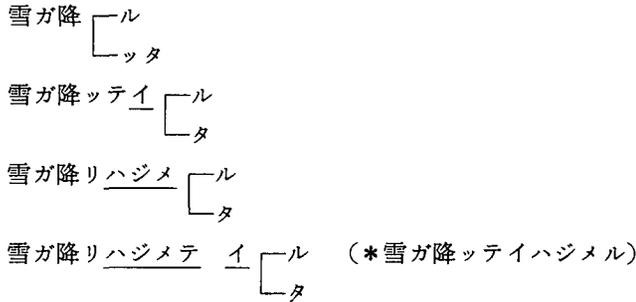
(iii) 三次的アスペクト

動詞の連用形に後続する補助動詞のうち、アスペクトをあらわすと考えられる～ハジメル、～カケル、～アゲルなどを三次的アスペクトとして、その意味と類型化を述べている。

(iv) アスペクトの重層

テ形に付くアスペクト形式を二次的とし、連用形に付くものを三次的アスペクトとするのは、

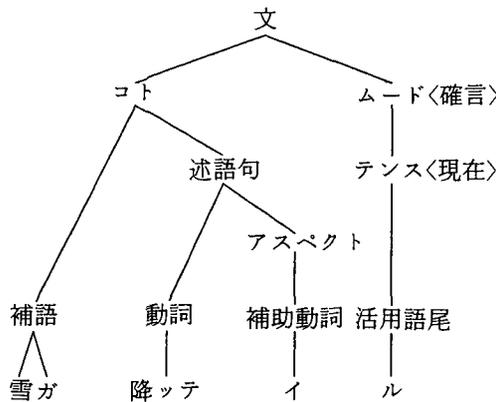
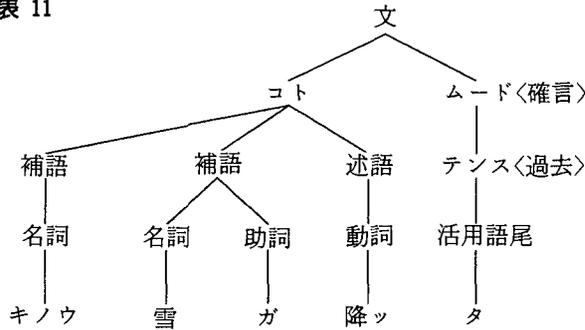
次のように、それらが並んで現れる場合、一般に前者が後に、後者が前に現れるからである。



一次的、二次的、三次的のアスペクトは、いずれもコトの内部の要素であるが、この順序で、より主観的な、ムードの要素に隣接する。

以上のテンス、アスペクトの形式を、文の構成の上で位置づけると、次のようになる。

表 11



(p. 173)

(v) 時間的相

開始：～ハジメル，～ダス，～カケル

継続：～ツヅケル，～ツヅク

終了：～オ瓦尔，～オエル，～ヤム

(vi) 空間的相

上と下への動きの方向：～アゲル，～アガル，～オロス，～クダス，～サガル，～サゲル，～オチル

内と外，周囲への方向：～コム，～コメル，～ダス，～マワス

ある目標にむかっての動き：～カケル，～カカル，～ツケル，～ツク，～カエス

(vii) 程度，密度，強さ，完成など：～ヌク，～キル，～コム，～トオス，～ツメル

### 3. 3. 2 寺村秀夫氏のアスペクト論の問題点

私は、奥田靖雄氏に従って、文法的な形スル(シタ)——シテイル(シテイタ)の対立によって示される、形態論的カテゴリーをアスペクトと認め、それぞれ「完成相」と「継続相」の体系をなすものとする。しかし、寺村は、(i)スルとシタの対立を「未然」と「已然」というアスペクトとしてとらえる(一次的形式)。また(ii)テイルとともにテアル、テシマウ、テイク、テクルのかたち(二次的形式)や、(iii)～ハジメル、～カケル、～アゲルなどのかたち(三次的形式)もアスペクトとしてとりあげている。このようなアスペクトの用語の用い方について、工藤(1986)は、(i)のものは、基本的にテンスの対立であること、(ii)のものは、動詞の一部分にしかないこと(降ってある、降っておくなどはいえない)や、準備性、受身性等の別の意味要素も入り込んでいること(シテオク、シテアルなど)、(iii)のものは、語彙的であって、文法的なかたちとしてはみとめがたいこと(シハジメル、シツツケル、シオワルなど)を指摘している。「アスペクト」と「アスペクチュアリティー」とを区別すること(小論の1. 2を参照)が必要なのである。アスペクトの概念を限定的にとらえれば、寺村にもスルとシテイルの基本的な対立が見えてきたのではないかと思う。

(i) 一次的アスペクトについて

この文法的なかたちは、基本的には「叙述法＝ムード」のなかでテンス・アスペクト的に対立しているが、いろいろの研究で論じられている通り、その意味・用法はそう単純ではない。

(1) キノウハ昼飯ヲタベタ

(2) モウ昼飯ヲタベタ

寺村は、この二つのシタの意味・用法に関して、(1)は「過去」というテンスを表し、(2)は、「已然」というアスペクトの意味を表すとする。しかし、工藤(1986)によれば、(1)の過去でも(2)の已然でも事象事態を非継続的に、点としてとらえている。つまり、アスペクト的には同じである。また、テンス的にも発話以前＝過去を表している点ではおなじである。違いは、(2)は、後続状況と関係づけられた先行運動の終結＝完了を表すという点にある。

鈴木重幸(1979)も、(1)は「アオリスト的な過去(＝現在からきりはなされた過去)」、(2)は「ベルフェクト的な過去(＝現在とむすびついた過去)」というニュアンスの差であって、「完成相過去」である点では同じ意味とする。

鈴木(1983)はまた寺村(1982 b)の考え方を批判する。

(1) 今あそこでやっているレンブラント展を(もう)見たか。(＊見るか)

——いや、まだ見ていない。(＊見なかった、?見ない)

(2) 先月のレンブラント展を見たか。(＊見るか)

—いや、見なかった。

寺村が完了のタと過去のタを相互排他的なものとして、(1)を完了、(2)を過去とみとめる見解に対して、鈴木は、～シタはテンス＝アスペクト的な形であって、テンス的な意味とアスペクト的な意味とをともにもっていて、いわゆる完了の～シタがもっぱらアスペクト的な意味(完了)を表すアスペクトのカテゴリーのメンバーでないことは、それに対立するもっぱらアスペクト的な意味(未完了)を表す独立の形がないことでうらづけられるのだとする。

寺村があげている「未然」の例は、

コノ子ハ今ニ大キクナル  
市長ハ間モナク到着シマス

であるが、寺村自身も述べているように、基本形が「単なる」未来を表しているのか、現在における未然を表しているのかは、区別しがたい。

このように、現代日本語では、終止形叙述法のスルとシタを「未然」—「已然」の対立でとらえることはできない。

(ii) 二次的アスペクトとしてシテイルをシテイク、シテクル等の派生動詞と同列に扱うことについて検討してみよう。

まず、この分類法で疑問に思えることは、シテイルをスルの対立する形態としてとらえないで「テ形に後続する補助動詞」として扱っていること、つまり質的に異なるものを同じ二次的アスペクトに入れていることである。

シテイルはスルに対立する基本的な形式であって、テ形に接続する補助動詞の部類にはけっしてはならない。寺村が文の構成図で示しているように、「イ」という形態素がアスペクトを担っているとは理解しがたい。

また、同じ二次的アスペクトの形式として分類されているものでも、paradigmaticに対立しないものは、「～てしまっている」「～てきている」などくみあわせることが可能である。

工藤(1989)の説明によれば、派生動詞の系列は運動自体の限界と関わっての時間的展開段階の限定をおこなうが、他の運動との時間的關係は表さない。それに対して、スルーシテイルの対立はできごと間の時間的關係の点での結束性を示す機能をもつ。この機能とむすびついて、とらえかたの相違がでてくる。

(iii) 三次的アスペクトについて

これらは、二次的アスペクトに入れられているシテイル以外の形式とともに、形態論的カテゴリーとしてのアスペクトとは、分析のレベルを異にするものである。意味論的(語彙的)手段によって表されるアスペクト的意味は、言語学研究会の研究成果にもとづいて、「アスペクチュアリティ」の用語のもとに区別して分析すべきだと思う。小論の1. 2でもふれたが、奥田「時間の表現(2)」(1988)に、アスペクチュアリティの考察がくわしい。

形態論的なかたちとしてのアスペクトを動詞にそなえている言語では、アスペクチュアリ

ティの研究は、アスペクチュアリティに属するさまざまなアスペクチュアルな意味がそこで  
こんとんとうずまく、アスペクトの調査からはじまっています、アスペクチュアリティの意味  
領域に属する、さまざまな意味的な要素は、そこからとりだされるのである。……(中略)

したがって、アスペクチュアリティはアスペクトによって代表されるといって、あやまり  
にはならないだろう。とすれば、動詞のアスペクトをそのほかの、アスペクチュアリティの  
構成要素とおなじ列にならべるわけにはいかない。(p. 36-7)

なお、(v)の「時間的相」以外の「空間的相」,「程度,密度,強さ,完成など」の部類の形  
式はアスペクチュアリティの領域に属さない派生動詞ではなからうか。

#### 4 おわりに

日本語文法のシンタクス・文の内部構造論の内実を豊かにし、また日本語教育者として、日  
本語文法の現象を数多く観察し、そのするどい指摘が、他の研究者、とりわけ言語学研究会に  
刺激をあたえた点で、寺村を日本語学者として高く評価すべきであろう。しかしながら、日本  
語文法の体系の記述において、寺村にはいくつかの問題点をみいだすことができる。

まず、単語の認定をめぐることは、寺村は助動詞をとりだし、形態素に意味と機能をあたえて  
いる点で、学校文法をのりこえてはいない。

テンス・アスペクトの記述においても、形態論のレベルは、スルーシタがテンス的対立を示  
し、スルーシテイルが完成相か継続相かというアスペクト的対立を示していることを認めない  
で、スルーシタにアスペクチュアルな意味の一部分にすぎない「未然」と「已然」の意味をあ  
たえている。アスペクトという用語も過度に広義に用いており、シテイルを他のアスペクチュ  
アリティの諸形式と同じレベルで説明している。つまり、テンス・アスペクト論が意味論主義  
的で、テンス・アスペクトの体系の記述に成功したとはいえない。

また、テンスの観察の視点として設定している(iii)の「叙実的」か「叙想的」かの問題も、  
「叙実的」用法にはスルとシタの対立が認められるが、「叙想的」用法はシタにしかないことで、  
このとらえかたもテンスの体系を明白にしていけない。

私の今後の課題としては、「非終止」(従属節)の位置におけるテンス・アスペクトの研究を  
考えている。寺村および言語学研究会のメンバーによって「非終止」の位置に現れる動詞のテ  
ンス・アスペクトの意味の研究がなされているが、まだ考察が充分だとはいえない。これらの  
先行論文にまなびながら、課題に取り組んでいきたい。

#### 【参考文献】

- 奥田靖雄 1977 「アスペクトの研究をめぐる——金田一的段階」(宮城教育大学『国語国文』8)  
—— 1978 「アスペクトの研究をめぐる(上)(下)」『教育国語』53, 54  
—— 1988 「時間の表現(1)(2)」『教育国語』94, 95  
金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」(金田一編1976に所収)  
—— 1955 「日本語動詞のテンスとアスペクト」(金田一編1976に所収)  
—— 編1976 『日本語動詞のアスペクト』(むぎ書房)  
工藤真由美 1982 「シテイル形式の意味記述」(武蔵大学『人文学会雑誌』13巻4号)

- 1986 「アスペクトについてのおぼえがき」『国文学解釈と鑑賞』51 卷 1 号
- 1987 「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91
- 1989 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」(言語学研究会編 1989 に所収)
- 言語学研究会編 1979 「言語の研究」(むぎ書房)
- 1988 『ことばの科学』2 (むぎ書房)
- 1989 『ことばの科学』3 (むぎ書房)
- 1991 『ことばの科学』5 (むぎ書房)
- 鈴木重幸 1957 「日本語の動詞のすがた(アスペクト)について——～スルの形とシテイルの形」(金田一編 1976 に所収)
- 1958 「日本語の動詞のとき(テンス)とすがた(アスペクト)」(金田一編 1976 に所収)
- 1965 「現代日本語の動詞のテンス——言いきりの述語に使われたばあい」(鈴木重幸 1972 b に所収)
- 1972 a 『日本語文法・形態論』(むぎ書房)
- 1972 b 『文法と文法指導』(むぎ書房)
- 1979 「現代日本語の動詞のテンス——終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい」(言語学研究会編 1979 に所収)
- 1983 「形態論的なカテゴリーについて」『教育国語』72
- 1989 「動詞の活用形・活用表をめぐる」(言語学研究会編 1989 に所収)
- 高橋太郎 1969 「すがたともくろみ」(金田一編 1976 に所収)
- 1985 『現代日本語の動詞のアスペクトとテンス』(秀英出版)
- 1987 a 「動詞その 1」『教育国語』88
- 1987 b 「動詞その 2」『教育国語』89
- 寺村秀夫 1971 「タの意味と機能——アスペクト・テンス・ムードの構文的な位置づけ」(寺村秀夫 1984 に所収)
- 1982 a 『日本語のシンタクスと意味 I』(くろしお出版)
- 1982 b 「テンス・アスペクトのコト的側面とムード的側面」『日本語学』1 卷 2 号
- 1984 『日本語のシンタクスと意味 II』(くろしお出版)